



竹永翁物語

一



尾張小川
宜之藏書

以前と云言なり。安閑紀に往歳古語拾遺に久代との記。常は疇字
也曠曠也左傳註曠昔猶前日。昔字。左傳疏。按今而稱。昔字。上世謂之昔者也。万葉集
也曠尔雅疏。在今而道既往。昔字。上世謂之昔者也。万葉集
卷子。まづりゆく時見る毎に心いづる。牟可之の人し思ほゆる。か
し。り。○竹取翁ハ竹と採り物造て其を鬻て世業をひまば世人然
稱し由なり。○といふ者。りり。伊勢物語。十五。昔紀有常とい
ふ人をけり。大和物語。十三。右馬允藤原千兼といふ人は妻を俊子
といふ人なれ有る。なげの例に從へ。いづるとを本の惡く。○野
山はゆじまてい古今集。春。下。いづと今日ハ春の山邊に交なると暮なば
なげの花は陰のは。後撰集。春。上。春雨のふらば野山に交なると梅の花
笠有と云なり。れども。交と云言今ハ彼と是と互に相雜とのと云

ど古へも山に入野に入をも云しなり。○竹と採り。此。と云言
てて。通。聞。ゆ。れ。猶言を云重ぬべきと省く。意なり。古今。秋。上。子
山里秋こそ殊に侘しけし鹿の鳴音を目を覺し。と。と。と。度々
目と寤し。と。と。と。此も其定に。竹と採り。と。と。と。伊
勢物語。八十。二段。まか。し。し。ま。て。仕。ま。つ。り。け。と。と。と。同し。○よ
ろ。つ。れ。更。は。ハ。類。本。は。從。つ。宇。治。拾。遺。物。語。卷。六。加。茂。社。は。祈。米。此。米
を。方。ま。け。う。ふ。に。と。何。れ。は。更。と。云。言。わ。れ。本。も。悪。う。と。折。籠。の。類
は。始。竹。の。用。多。き。更。數。へ。の。や。し。今。昔。物。語。旧。本。に。載。つ。る。ハ。竹。を。取
る。籠。を。作。る。要。す。る。人。は。與。へ。其。功。と。取。て。世。を。渡。ら。る。に。と。何。り。此
る。ハ。略。ら。と。○さ。ぬ。ま。い。翁。の。姓。な。り。諸。本。せ。ら。る。ま。じ。或。ハ。さ。の。ま。と。を

類本より従つ改つ。大秀既よまゝの誤なりと云置つるの按よ不
 違ざり。姓氏録右京讚岐公大足彦忍代別天皇子五十香足彦
 命之後と何れど是を誤り又和泉國酒部公讚岐公同祖神擲別命
 景行天皇之後也と云ハ宜しき由師記傳廿四卷六の卷説なり朝臣の姓を賜し
 皇太子皇太子之後也と云ハ宜しき由師記傳廿四卷六の卷説なり朝臣の姓を賜し
 更續後紀卷五六丁よん、和氣朝臣と改めひ、更三代実録卷九八丁よん也
 此姓なりと思ふ。由下十三よ云き○こやめとあるハ名な
 ことカネあはれ云こ、諸本皆脱きり下よ従つ補つ造ハ御臣の意
 なる由師記傳卷七説なり

そ竹のすまモトなひのけヒトスチ一筋をたり何やしづりて寄てゑる。
 よ筒ツクなこの光ヒカリふりそけとんサシズンこ寸サシなるなる。人ヒトの心

まゝくしてゐり

○本ひの竹云ハ其光を奇イしく猶能見ミまゝ立寄ツキてゑるよ其
 光ハ筒中より出るり又其光を見せし其中チゴ小兒コゴも其光ヒなり
 さて小兒の光なる由此イハハ不云フく此兒の容躰云知屋内イ光満
 るりヒトスチと云く此竹の光ハ即此兒の身より出ツクなる由イあるはなり○
 一筋ヒトスチありけヒハ抄本ヒハ竹ヒな一筋をりり写本になんと云く下を
 けヒるヒときり何ヒも辞格チニラなる今ハ写本ヒより下を改つ○よりて
 見ミるヒハ抄本ヒより従つ按本ヒより取ヒく写本ヒより之ヒ終ヒむと有り○筒ツクハ和名
 抄ヒ唐韻ヒ云筒ヒ音同ヒ一音棟ヒ竹名也と云く都ツクと云訓ヒを漏ヒきり○三
 寸計ヒなる人ヒハ抄本ヒより従つ活本ヒハ計ヒのと有り三寸ヒハ字音ヒ唱ヒべ

あしとをさるるにせしむるなり。まほしきものなり。

○此段抄本ハ久しきなりさうえよりいすはては

かむりし勝きり此の上の金ある母を数くみちを勢ひ

剛くまはるよしなり○あし猛莫杏切健也 字ハ音なり師云く

漢音バウ呉音ミヤウなれども常ハ漢をウと呼といはれ落四

物語ニ三位中将清 由あしとまてされ追ちしつをよひ

て請ふ宇治拾遺ニ大友皇子ハ時政を世にむらふといき

いも猛なりといふ

此子いづれにやむねはるるなるにまはるるのあしとをさるるに
て附した秋田なるものかむりしはるるに日まはるるに

げあしとをさるるにせしむるなり。まほしきものなり。
あしとをさるるに

○とむろとハ地名なりハ万葉ニの十ニ玉匣将見圓山乃或本

歌云玉匣三室戸山乃とをを解ニ卷七ニ見諸戸山とをハ旅哥の才

よみて備中國のみむろをなすハ山城の宇治ニ三室戸と云はる

と後みるとえむるを此ハ乃れはる又あしとをさるる可考

宇治拾遺ニ三室戸僧正とて三井の門院とやとむらひ人ぬし

らも隆家帥の弟四子なりと云るを宇治歎きて此下の字脱る地

名の下なるは必のと云ハ○齋部ハ姓なり○秋田ハ名なり博士

なると准て作まる名なり○なよけハ冠辞考ニ万葉に奈用竹の

かきよのうらら名湯竹のともよること、是ハるゝ和なる女の姿を形
よやのなる竹の譬て冠をきり、ちも竹ハ女竹まで皮竹とも云く
殊に形ようらにふもあハ然云といはれき、幕木巻空蟬の人づら
のふもあぎよの剛ま心とさひく加ふれハたよ竹のこもちして
たひのま折てあゝのい竹より出づる人なほハ女の手弱
やのなるもあゝ奈用竹めて舞なるなり○かきよひまといはる
古板本よとる類本よ附つて抄本よ付とるもあゝとる
と云言ハかゝる処よかきよ姫ハるのこもあゝて身ハ光映ある
有へき言よあゝす垂更と取て附てゝるも古更記の師木玉垣宮殿ハ天皇垂娶大筒木垂
根王之女加具夜比賣命生御子表邪辨王とて、此後の名を取る致

と河社よ何も師云加具ハ赫と云意其ハ迦賀とも迦藝とも加具と
も加宜とも活て同言なり炫ハ加賀と訓て靈異記ハ炫を加く也
計利と刈と火之迦具土神炫云まお大秀按ハ夜ハ加賀也久
を省て也と云る欤とも思へや狩考るに師の高比賣命の歌ハ阿那
陀麻波夜とを波夜ハ光映と照曜を云なり速玉之男熊野早玉
神社とて、も皆映玉の意なると思へ又木花之佐久夜毘賣命の佐
久夜ハ開光映の伎波を切めて加なるハ通りして久と云なりと記
云はるも彼後の名も加具波夜を切て加具夜と申意なるも
明けしきは此物語なるも具を濁く加具夜比賣と訓てして大
筒木垂根王讚岐垂根王此二王之女五柱也とて、此後も其中の一

柱なるはし其御伯父讚岐垂根王なるも思ふて讚岐と云姓も
 阿婆ハ此竹取翁とすぬぎの姓と為るも何れも阿婆と云此いふと思
 うは云なり 前より云置つるは後より類役本と
 又此ハ造麻呂の姓さぬきとありま 後ハ大鏡ハ
 小野宮左大臣云々さういふる女房とめしつひひなるほかに
 阿婆のうら生ひつらる女房かや姫と申はるなり○
 阿婆ハ古史記ハ 日代宮ニシテハ多岐トミトコト
 段ハ 言動為御室樂と有りて傳ハ樂ハ宇多宜と
 訓ハ拍上の切まりなり頭宗紀ハ天皇為室壽曰ク手掌摺亮
 拍上賜吾常世等と有り是なり酒を飲樂て手と拍上るより云る名
 かりと云由鈴木氏云阿婆ハ次第ハ聲高く拍と云と云終る藤原君
 卷ハ 上野宮阿婆官の價なる
 女を得て酒宴し於処ハ すぐく七日七夜と云れ阿婆と云て打

阿婆あまふと阿婆俗ハ嫁入の時壻なる者の婦翁ハ伴ハ始行
 る。時の酒宴を美濃とてウチヤゲと云飛驒とてウチヤゲ 正ウチヤゲ
 と云是古言は残るなり○阿婆の阿婆ハ古史記ハ 石屋戸ハ為樂
 段ハ
 やまを阿婆と云ふ 天若日ハヤヒヨフ
 子段ハ 日八日夜八夜以遊也 阿婆ハ
 宮段ハ 阿婆
 勢其大御琴と有り傳ハ凡そ歌舞管絃をハ皆阿婆と云ひ体言に
 阿婆と云ふと云ふ阿婆と云ふと云言の本ハ今俗も云と同意なるハ何
 態も云中ハ歌舞管絃ハ遊の至極なる者殊に其名を負るやま
 と云終る枕冊子ハ 琵琶声ハ止て
 と有り段ハ 殿上人々ハ御高まりて遊
 あり。宇治拾遺 卷ハ
 一ハ 鬼の酒宴ハ壻と云 壻ハ舞出する処ハ 酒あまを遊阿婆と云幸
 しく此あまを遊と云ふと云阿婆ハ此ハ名を付る。祝更ハ種

世帯の事

世帯の事... 貴しけり... 賤しけり... 和名抄... 丈夫也... 伊勢物語... 母なん何てぞ

○此廣き世界に所在男と云意あり其中より貴しけり賤しけりよ
しやち○をのこし和名抄に説文云男乃古丈夫也とあり本ハ男
の子お意なきときと後ハ凡て男と云々表美那に對する○あてハ
下天の羽衣は段よ心づくやも何てやうも伊勢物語段よ母なん何てぞ

る人まさん何なり。又段よひりりいりま男はま...
人ハ何しや... 源氏ハ上手め... 此上衆を訓は... 此ハ反
云はま俗ハ上品と云ふ... 〇又... 此ハ... 目ハ見
ま... 〇聞め... 仲忠母... 琴学... 此物の
事... 聞警見... 古更記... 同風ハ
詞... 赫映姫の貌... 人傳ハ聞て戀慕なり... 〇ま... 大和
物語七十
六段ハ監け命婦と彈正親王と... 〇ま... 大和

ひびひたりと心の締ヒツリなく思惑オモヒなり今俗イマノにホルと云イハるコト。堪囊抄タマシの
 忙々マシマシ又マシ悦々エツエツと書カキてホルと云イハるコト。文選モンゼンの魂タマ悦々エツエツ以失度オシタと云イハるコト。李善リゼン
 の注ツキに悦エツくと失意シツイと釋シヤクきりて何ナニと云イハるコト。○るコトのやひヒと云イハるコト。下シタ段ダン十丁ジュウテイも
 何ナニか。欽明紀キンメイキの元年九月新羅を征セイすを議ギぬふ条ジョウなり。少計シウケイ軍卒クンソク不可易征イカヤクセイ云イハるコト。新羅怨曠積シンラクオンクヤクシキ
 年不可輕ネンイカクシヤク而伐ニシテバツ俊蔭シュンイン卷マキを琴コト杖ウヅを乞ヒコぬ。天女テンニョ下シタおしシテ遊ユびノ所トコロ
 なりふナリふフやひヒくクあひヒくク飛トビと云イハるコト。何ナニか續紀ツヅキキの第七詔ナナシノミコトこノハ師シの詔ミコト詞シ天テン
 下シタ乃ナラバ更シタ多夜須タヤス行ユク止トドマ所念坐ソケンザ而ニシテ何ナニり容易ヤスクと云イハるコト。多タを發語ハツゴの
 ゆき波ユキナミと助辞ツクシとせセるコト。なり波ナリナミ字ジなナと云イハるコト。等閑トウカンなりコト。輕カホみら
 ぬヌよヨなナりコト。○るコトのやひヒと云イハるコト。下シタ御侍行ミヤサマノユキの段ダンも對面タイメンすコト。何ナニと
 申マウにシてモもモ同格ドウカクの辞シなり。詞瓊シツユキ論ロンの此コノ辞シハ賤シヤクと云イハるコト。聞クよヨと云イハるコト。何ナニと云イハるコト。

かりと云イハるコト。まマしシハハと云イハるコト。何ナニと云イハるコト。下シタ續ツヅくコト。何ナニと云イハるコト。常トコの更シタもモ
 書紀シキの歌ウタのすスらラあアと云イハるコト。まマしシハハと云イハるコト。何ナニと云イハるコト。常トコの更シタもモ
海雲比丘童海雲カイウン比丘童ヒクドウ但シカ今イマハハ汝ニをシるコト。何ナニと云イハるコト。○るコトのやひヒと云イハるコト。
子に云詞子コにシテ云イハるコト。但シカ今イマハハ汝ニをシるコト。何ナニと云イハるコト。○るコトのやひヒと云イハるコト。
當時當トキ時トキハハかカくク云イハるコト。何ナニと云イハるコト。○るコトのやひヒと云イハるコト。
安寝毛不宿安寝ヤスネ毛モ不ズ宿ズ余ニをシるコト。何ナニと云イハるコト。○るコトのやひヒと云イハるコト。
のやひのヤひヒもモ何ナニと云イハるコト。○るコトのやひヒと云イハるコト。
のやひのヤひヒもモ何ナニと云イハるコト。○るコトのやひヒと云イハるコト。
もさもサと云イハるコト。○るコトのやひヒと云イハるコト。

初花卷寛弘二年土御門家行幸に用意の処に おがしりしをせぬふ安きいも大

とみぞもびやうなるゆもて知し○闇の夜も出ても穴を

まもろかよりののぞけいよこ古板本の闇夜も出ても穴

とくまかいたまこ写本かいよこの上もあひハと補り無

くて宜しけきバかび今抄本古板本を補て用づのぞけも加

いよみも同意なるを斯様カ重て云る下も祈し願をふてなご此

書み殊多し○穴とくぞい神武紀天手扶八十枚手扶此云

註以手指別扶也今所謂手壺小壺之類と云穴と凹和名抄五

唐韻云觿許規反和角錐童子佩觿說文云角銳端可以解結者也字

鏡子則宛同鳥丸反割也挑也沙石集卷六子邪命說法ハ三千世界の人

眼とくくよりも罪なりぬと云此ハ指先もて垣子穴を彫ハ

くくより○のぞきハ字鏡子關苦規反靚也睨也望也莅規勅也反

也乃手察反竊見之曾牟聲貞字加不もそのぞくものぞむも同意なり中務集子

生の竊伺を傳子かまおみと訓て垣間見なり是をかいたまこと云ハ

音便も後の更なりと云るさて此段帳の内より不令出かしづ

く更と云る玉造小町仕衰書被籠華帳之裏不歩外戸被愛朱簾之

内無行傍門長恨歌子揚家有女初長成養在深窓人未識なり意み

く此詩の詞よりて葺木卷子かやなりと立なりゆりて何がてゆひ

○竹取翁物語解卷一
十八

きたるも終る空の内なるほろいも片かきを聞傳へしことごと
くしるも何の事ともなく此をよほしよも何ん歎○よほしハ古事
記八千九神の御哥佐用婆比在る用婆比用婆比用何りつゝもくもあ
傳よほしハ万葉結替とさる靈異記ハ伉儷不と何と言
け意ハ呼りしりゆいひ今世の語ヲ婦トよぶと云も此ナリ竹取物
語ヲさしめしよゆいひよほしハ云らふと云るハ殊更ハ奥ニ作
て云るなり万葉ハ夜延為とさる正字ハあはれと云はれり伊
勢大和の物語ハこゆる多く出ゆる言ハ夜ハ隠ク這ルも
云意ハあはれと此ハ其意ナリと云はるる奥ナリ然リ玉葛卷
よけし人ハ衆ハ隠ルもあはれしハ云はれし新猿

樂記ハ十三娘者云近來有夜這人ト書ハハ夜延ト心得ルなりき
る本ハ呼レれども夜延の意ト附ルしき更ノまよはれハ當
時ヲや然心得ルなり久方ノ雨ト云ルと催馬樂ハ謡詠
くひぢらるる雨ト云ルと須磨卷も肱笠ト云意ト心
得ルひぢらるる雨トかづりきと取ル同ク類ナリ俊蔭卷の事ト
形カキありまよたて人ハ勝ルるハと娘トもさる人ハ婚ルる
其婚ハまよとよと一本ハその事トなり又伊勢
物語ハ昔物ト云ルる女ハ昔男ト何りる人ノ娘ハか
いごと此男ハ物トいハ思ヒきり宇治拾遺卷三ハ小式部内侍ハ定頼
中納言トの云ルるハ俊蔭卷の事ト帝春宮父ハの女ハ

こまをとりしはとくの人多うり、小町壮衰書、君臣子孫争婚
姻、於日夜富貴主客競、仇儷、於時辰とまよ似つり人字ハ抄本より後て
加一諸本多うり、こまをひ古板本より削つ

たつらぬ人、やうやうあり、たつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、
りり其中、たつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、
たつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、

○意慕ふ人多うり、たつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、
は此残さる五人ハ甚く心深く思惑へ人となり、○たつらぬ人、
ろろたつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、
すゝたつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、

弱王天皇と斬殺をせしむるを大 ウチモノオトリカテオホロカニカモセリ 猶傳十七 源頼朝
長谷王黒日子王告ゆ カネ 不驚而有緩怠之心 鉤の下可考 下

此人 コノヒト 心をいざしぬるのたつらぬ人、たつらぬ人、
かゝやうにたつらぬ人、たつらぬ人、たつらぬ人、

おぼさまをたつらぬ人を考知べし大方に思人、志深、
人といふやうに、○やうやうに、諸本よ、と作ま、
たりやくと音便、やうと云、益ハ呉音イヤク漢音工キなり、
を用、たつらぬ人、○たつらぬ人、古史記、
し万葉、阿流久阿留伎、あり物語書、あり、
バ、たつらぬ人、と云、雅言のめ、
此ハ即、たつらぬ人、と云、よ、たつらぬ人、
女、の許、たつらぬ人、忍、たつらぬ人、

何りきと云又催馬樂子いりきしやをしのかもるいどゆりぞ
於毛い何りきと云いなるぞ我あはさきんふもや葵卷子葵
物記の処は源君 詩もく思オホしなぐくに於ありきやど便ビシなき頃なり
忍遊行の事と 色など何り○よしぬしハ縁ヨレなし由ヨシなしぬどの意なるはは終ど是
も即无益不測イタダなりぬ意と字も下御狩行子よしなく後方くるも渡
終るぬ和泉式部集ははきくなるをりよしぬしるはぬらし更ど
も書付し宇治拾遺卷子 志貴山命ハ蓮蓮の段蓮もハ國信濃濃へ歸信る思信り終
どもよしぬしきる无佛世界のやなる死へ歸信るはぬらし何り○猶
云らるハ健冬ハ名高き色好なりぬ云終ハ此名名を致と云つまど猶名
とぬらるる程なりぬし○色好といへるも限限五人古板本よりりつ

抄本より五人と何り古今序は色好の家伊勢物語廿九子源至と
云天下の色好なりぬ何り○思やむ時ヨルヒなく夜晝來ヨルヒらり抄本より
止更なくと何り古板本より來りりるも何きと類本より從て削つ
ゆゑイシノコひとりハ石作皇子一人ハイシノコもひとり一人ハ右大臣阿倍
のみオホうし一人ハ大納言大伴オホのよむオホハ中納言石上の麻呂
も此人オホなりりる

○此段類本写本ハ其名ども石作の御子とくもちり終子とと五
人次く書はげけ一人ハと云くもし其シも宜ヨシ可め終ど此物語の
文体すべく言を重オモく云る更多り終ハ此も一人ハ云一人ハ云と細オモ
子云るぞ宜しとぬらる思オモり故カ今ハ抄本よりりつさて何べの

こゝの下の大納言一人ハ大伴の之ゆき中納言一人ハ石上麻呂
つらとみハ錯置ミカレの疑タガなき程バ例よりて改つ○石作のみ
こ九皇子ハ御名の例文徳実録卷一ハ先朝之制每皇子生以乳母姓為
之名為故以神野為天皇嵯諱と云々なり
持モチた乳母の姓なるをとり取りなり石作と云ハ佛の石鉢を
偽イナリ作シする更云すとして設テつる名なり姓氏録左京石作連火明命六
世孫建真利根命後也垂仁天皇御世奉為皇后日葉酸媛命作石指獻
之仍賜姓石作大連公也と云なり續後紀十石作王と云又也○
之左京もられ皇子ハ姓氏録皇別車持公上毛野朝臣同祖豐城入彦
命八世孫射狹君之後也雄略天皇御世供進乘輿仍賜姓車持公と云

是續紀ハ車持朝臣の人多く又同姓欽車キマとクラと稱ハルマの切
ラハと云はれぬもきてと云持乃皇子と云名を設つるハ之ハハの
意ハ取リ偽シはれよと云り云々と思ヒ依リまするなり之ハ偽シはれと云
りま心マやハハ聞キき更シ々シと云又博バク変ヘンする者ハ道理スガなる更シず
と云りすと云采サイハ操カサを構カて人と謀カを云ハ采と云と云○右大臣阿
倍のみましハ諸本左大臣阿倍のみましと云書き本ハ此コハ右
大臣三字を脱して末ハ右大臣とあり繪合エ卷マ引キつるハ阿倍
のめりしと云何ナニも御主人ミの誤アなり故今左サを右ミと云しと云
ましと改つ○大納言大伴の之ゆきハ御行ミなり○中納言石上イのま
らハ此コ人ヒトハ諸本もろろ此コ人ヒトハハおろろなりと云

今改つ。抑此三人の更田中道麻呂主云此人續紀に又ありむ
らしハ源氏物語に於りしとまた從之しと云ふしとハ人御主人
を訓めて心當り訓付る。石上のよるふらハ一本にお
ろふと云ふ。麻呂ハ名もハ唯ま下は續く詞なりと口自
云はしを鈴木氏ゆつと語。終ま此説まことに宜し。書紀に持統
天皇十年冬十月己巳朔庚寅假賜正廣參位右大臣丹治真人嶋資人
一百二十人正廣肆大納言阿倍朝臣御主人大伴宿祢御行並八十人
直廣壹石上朝臣麻呂直廣貳藤原朝臣不比等並五十人と何れと見
れば此三人乃名を借るなり。○阿倍ハ姓氏録に左京阿倍朝
臣孝元天皇之子大彥命之後也と云ふ。天武紀に十三年阿倍臣賜姓

曰朝臣とあり○みしハ御主人なり其と源氏物語に於りしと
も猶誤なり御ハ後世ぬらんぬんや呼をよぬしぬしなど訓
ひのめみむしハ濁しと云ふとぬしなど字し色々混乱
してむの入るに又るをらと誤るものなり師云御主人ハ美宇
志と訓へし古史記に丹波比古多須美知能宇斯王傳廿二と云ふ書
紀に道主と何り奴志ハ能宇志の切りて大人なり此人の姓天
武紀持統紀にハ布勢朝臣と何りて持統天皇十年の條に始て阿倍
朝臣と何り。續紀にハ阿倍布勢朝臣御大人と云ふ処も何り布勢朝
臣ハ姓氏録に阿倍朝臣同祖とあるハ此人の族と云ふ勢なりしハ
阿倍に改らばなりと云ふ。阿字古事記書紀續紀姓氏録等
にハ阿との何り續後紀にハ

安字を用く今ハ多く安とのを用たり倍ハ皆倍續紀子文武天皇四年八月丁卯阿倍朝臣御主人大伴宿祢御行並授正廣參褒善政也は
大寶元年三月甲午授大納言正廣參阿倍朝臣御主人正從二位中
納言直廣壹石上朝臣麻呂正正三位同日以大納言正從二位阿倍朝
臣御主人為右大臣中納言正正三位石上朝臣麻呂為大納言同月壬
寅賜右大臣從二位阿倍朝臣御主人絕五百疋絲四百絢布五十段鑿
一万口鐵五万斤備前備中但馬安藝國田二十町同年七月壬辰勅先
朝論功行封時賜大伴連御行阿倍普勢臣御主人十一各一百戶按
大伴宿祢御行ハ此年正月薨き御連と云々連の樣ナリハ別人の
と云々御主人ハ阿倍普勢臣とありハ別人ハあり今ハ壬
申年の功子隨て賜封されバ即其壬申の記
子然何の俣子此も記さるるなるべし 同三年閏四月辛酉朔右

大臣從二位阿倍朝臣御主人薨遣正三位石上麻呂等弔賻之難波朝
左大臣倉掾麻呂之子也難波以下十三字書紀何り當時左大臣ハ
多治比嶋公なり御主人公ハ左大臣ハ昇ノ後ハ次下ニ右大臣
何り從て此も改續紀卷三子御主人公男廣○大伴ハ姓氏録子左
神大伴宿祢高皇產靈尊五世孫天押日命之後也初天孫彥火瓊杵
尊神駕之降也天押日命大來目部立御前降于日向高千穗峯然後以
大來目部為天靱負部天靱負之号起於此也雄略天皇御世以天靱負
賜大連公奏曰衛門閑廬之務於職已重若一身難堪望與愚兒語相伴
奉衛左右勅依奏是大伴佐伯二氏掌左右閑廬之縁也と見え天武紀
子大伴連佐伯連姓曰宿祢何り○と申すハ御行なり續紀子大寶

元年正月己丑大納言正廣參大伴宿祢御行薨帝甚悼惜之遣直廣肆
榎井朝臣倭麻呂等監護喪事遣直廣壹藤原朝臣不比等就第宣詔贈
正廣貳右大臣御行難波朝右大臣大紫長德之子也○いそ
あふひの姓氏録左京皇別石上朝臣神饒速日命之後也宇摩志麻治命十
六世孫物部連公
麻呂賜物部朝臣姓後記云此細書ハ後人の旧吏記ヲ從テ出
改賜石上朝臣姓傳加つるものなる一連公ト公字を添へるハ例なきる一て旧吏
記の一然ある一なり一物部連麻呂ハ天武紀一出る終る朝臣の姓
を賜へるハ信一此一人一麻呂の世一なり又石上一と改めりしるハ書紀一ニ
える終るも同卷一の末又持統紀一石上朝臣麻呂一と見える一大秀云朱鳥
年一も石上朝臣麻呂一と見える一と次一ニ十八氏一を擧げる一如しも石上
四年一ハ物部麻呂朝臣一と一なり

とあはれは是も此人の世一改めりしる明一なして石上一ハ石上の神
室を物部氏の掌一て氏を石上一と改住地一も即石上一ニ在るむ一よ終る
と云はれよ○麻呂一ハ續紀一ニ元正天皇養老元年三月癸卯左大臣正二
位石上朝臣麻呂薨帝悼惜焉為之罷朝詔遣式部卿正二位長屋王左
大辨從四位下多治比真人三宅麻呂就第吊賻之贈從一位右少辨從
五位上上毛野朝臣廣人為太政官之誅式部少輔正五位下穗積朝臣
老オホ為五位已上之誅兵部大丞正六位上當麻真人東人為六位已下之
誅百姓追慕無不痛惜焉大臣泊瀨朝倉朝庭大連物部目之後難波朝
衛部大華上宇麻呂之子也○いそ中納言なりし一更一ハ上一ニ出るる一大
室元年三月甲午の紀一ニ見える一其日御主人公ハ右大臣一ニ麻呂公ハ

○かひぢぢ〜思ぢぢ〜ハ幾度行ても目も見えるもなほ思ぢぢ
 て〜うひぢぢ歩行〜兼て思知〜も徒も〜得も不居〜を恋しぢ
 ぢ催ぢぢ〜あ〜く〜出て艱難辛苦をして通來るなり思へ〜も
 ハ來り〜係まり○降水ハ十一月十二月ごろ風何〜雪の降
 も又道を埋て歩行〜も氷き〜夜の寒き〜もなり○照る
 づ〜ハ本居翁の云〜照霆なり万葉十光神鳴波多燃嬌〜何〜も
 冠辞より受〜ハ鳴は〜と受〜なりと云は〜字書ハ霆雷
 餘声也又霹靂也又雷也或書ハ霹靂をハタ、ガミナリと訓也。
 字鏡ハ礮石声止〜日久又奈苗又謁齧声波とあ〜ハ雷声ハ何
 ろ〜と声を形容て波多と云る同例なり六月の地〜割て照日の

暑アキも夕立して雷鳴〜くにも不厭來〜る形り降水照霆ハ甚
 く省略〜る言なり。宇治拾遺卷山上なる卒都婆二麓より峯を登
 ぼ〜と〜ば〜道遠〜るを雨降風吹雷鳴と氷〜
 とも又暑〜苦〜夏も一日も〜必上〜此卒都婆を見り
 と何〜此の趣み似〜り○さ〜ハ障とを〜と云意なり。
 万葉卷石上ふるとも雨さ〜めや妹あ〜と云〜しもの
 を貫之集田屍風ハ雨ふる。時過バさ〜る〜老ぬ〜雨も
 田子ハさ〜ざり〜
 三句ハ宇治拾遺卷平仲本院侍後〜許
 三の浮る忍行〜処侍
 従
 かつる雨ハい〜り〜が〜さ〜んハむぢ〜何〜
 さ〜こ〜わ〜り

此人ある時ハ竹を喰ひてむすのひよふと云ふしをこのみ
まをすのつてまじむたのつたふね子なればんもまじむつて
あゝといひて月日をすむ。

○喚いでいかふ処抄本ハ皆よびつてしてとやうに作り諸本
子ハいづれともまじむつて下皆同じ。俊蔭巻子琴どもと取出
ゆゑに○手を摺のつまどハ抄本ハのつまどと何れど此言ハ
月日と通はると云へ係まゝバだと云ふ宜し。夕霧巻子大将女二宮
子強に逢せ
とち終ふを小 阿古君とてく押立ま一向なる所んなはるるせむい
少將止る処子 卷 東の男猿丸 猿手を摺てかまゝのども
そと手をす。宇治拾遺 十ととる処子
更子ゆるさ守りなど猿多あり。手と摺足を摺ハ爲便方なく切なる時

よするもななり故物を乞願と手然すれば乞願とて手を摺とも
搦手するとも云へ○なまぬハ不生と云ふ同じ。古更記ハ爲生成國
土奈何藤原君巻子此春子ゆかりなりて隠ししまむとあり今ん
より親子とむぬやと云へ○つらまむと云ふは一本子ま
らぶのつていも何り異更なれば。空蟬巻子空蟬君を
恋ひふ処強て思ふべき
心うもまむつていも苦しまふ思きつてとぬらひ自の歩心
も恋しハまむつていもすとなり
まむつていハ姫の上を翁が云なりせむのつていハ不令墮シタガハセみ翁自
我更を云意かり何れも厚ゆへし○月日をすむハ古板本ハ從
つ抄本ハゆくと云ふあゝのつてい古今上雜取とむる物もし何れ
縁ハ力をあゝ終何れとすむつてい哉。宇治拾遺卷六
初下後世を

ゞやうしんまご月日はあなへ過きりしやうも。又卷七の月日をたぐ
きよとあり

かゝれば此人の家をかゝる物をおもひのりまき一おぼおもひを思ひ
やめむとすまごよやめむとあり

○かゝればハ上件をよ言をて心を尽しと行通ひ翁よこごとよ
更成コトづくもあゝ縁ヅと云意なり思止止す云一係カまり○物を思ひ
の下に佐サと云言漏モるもめくゆわき上るも物もとくび思ひ
つとちれば元来モトヨリなりしやうと○いのり派しとをまをてハ
抄の異本よ祈いのりひをてとをハとらしどんハ願字の音なり凡
物語の詞よ祈いのりひをてつやど云ことまをてく足何とてハ悉皆字音

みくヅワンと云マ。土佐日記十二月廿二日の条和泉國まで平ヒラと祈いのりひ

もつとまも本ほんとんとんとを写うつりままるるて祈いのりも願ねがも同意
ちる派重はぢる言ことなり○やめむとすまごよと云を脱だつりす補おぎべし

と本居翁の云みくままはは後のちつ赫映姫を得えて種たねくみ心を尽つく
しむぐも承引ウケヒキされバ今いまハ為な便べんちちて怒おこる心を止とどめを祈いのりなり。万

葉ハ三さん十じゅうイいううて忘わするものぞ天地てんちに神かみを祈いのりど我われ思おもすすぬ。又また三さん天てん
地の神かみをも我われハ禱いたてき怒おこるるよハはかららてやめびりり六帖第六第だい五ごの

伊勢物語六十の怒おこるるとみみし河かよきし脚あし拔ひと云歌のくくり。
沙石集一の下したハ熊野くまのの某阿者あつちや梨上總りじょう國くにの女をんなに詣まつつるるを見て係けい想そう

して本尊権現の此意止むべし祈しむと同一類ひなり

ちりもほひもあはせきしむらと思ひしむらひもあはせきしむら
何れものも思ひしむら

○男合きざしきやいハ大和物語百州八段の故御息所の御姊つひも男
をてこむつと赫映姫と似たり其詞もおやぢど男何れせせと云
はれども伊勢物語井筒の段もおやぢど何れも更もききでちきまは
る○もむらこをぬつりハ神佛に祈てもやもかくにも思の止まじ
けまバ又更も思やう翁さハもも遂ハ男不アハ合で止まじ何れ
ずと自我心と思ふもて又彼家を行通ひて志の深きよしを見む
るなり○何れものもハ鈴木氏云俗ハムシヤウニと云意なり強字

と何れものも思ひてと訓同意なり○心ざしとてあり此
五人之れ同様よんひれも大和物語の菟原ウバ美女の段おまは
ら男チ沼男ノ似たり其の詞も是も彼もヨ万ヨ志を足りけバ思
佐ぬとも見えハ思ひと云更も怒る心ざしの深きよしを姫の
許キは達トぬぐ家人イニも入トきんとするなり貴人ハ御前ゆるさる
を目入るも云も始て見れけむと云も同し下御持幸の段も更も又由
はくも何れものも何れハ彼家を行通を云更上も云るのめし
よも思ひてけしむらも姫よりやう我もほほけしんご思
れ人と申ちあつららる。おやぢもあはせきしむらひもあはせきし
おろのねんぬの申さむらもあはせきしむらひもあはせきしむらひの何事との

のつまのしるしをさしおきしむる變化のちよも侍らざるをさしおきしむる
やうにさしおきしむるをさしおきしむる

○是と云ふ附てハ五人の人々其志の深きを翁見附ハ侍バえりち捨
かゞ姫子告る形り○この子ハ佛ハ抄本ハ佛と云ハ侍な
るべし。いづく尊と親と云ハ我仏と云と下天羽羽の段も何ぞ佛とある。
俊隆卷太政大臣の小君何ぞほけかろりまなねしそ○變
化の人ハ同卷仲忠琴を變化の者なるハ子の手母も勝まり藤
原君卷正頼公の子世界ハ人な不此族ハ人ハかろりまなねしそ○變
へまぐさの者なり天女降て産むるなりとゆるけふよと云此ハ變
化人ハあはれども男女のかけしハ寸べき更と云へ係まり○こ。

ら大まほきさまでハ抄本ハこれ程とみて下の傍子の字を補へり始其
子程と云是程と云こやといひと本居翁ハ云かこさ終つまバ猶按
にこれ程とあるもこれ程と云言を聞つるがたはささしらす
改つるもささし又ささしハ必のるを誤る致とも思しを更に
六帖第六のつ不等の證を得て本の宜しに更をとりぬ六帖第六程もな
く散たまものと櫻花こら久もあせつるが如俊隆卷右大
山の空カホに至て母子の客ミロウト人こら烈シゲし道ミチヲ打越て歎の満くふ
種姓シヨウセイを問ふ如も山を尋る心をバえおろのハたわさど猶のしよととも問は
へま云明石卷須六浦何の報ウチガタのこら横ヨコまな浪風ナミカゼ子
たぞし終るも何ハ同例の言なりこらハ常ハ物の負タゲ数れ

多きと云ふ此言に云時ハ甚き意と聞たり○何更をある
 ハ何そお意あるのこまるん更ハ何とのハ辭ありせん皆悉し加
 以傳ふと云なり○いんどののいふも云ハ姫の返答なり変化
 者とのいづも幼なりし間の更ハさしづべ我ハ実ハ父母と思居ぞ
 と云なり○いづハ類本ハさしづべの諸本ハハリふと云り
 於まぬまはしと云るこまよものなるといふおぼし七十と云り何
 まぬ今日とも明日ともさしづべ此世の人ハ何のいふも海に
 女ハさしづべのいふもさしづべのいふもさしづべのいふもさしづべ
 のいふもさしづべのいふもさしづべのいふもさしづべのいふもさしづべ

○さしづべハ翁の答て姫の承引と云悦なりさて次ハ翁

の意と述るなり○さしづべ此ちと云言ハ一ツニツおつり同
 さしづべ百ちさしづべの皆かどいふ言なり○今日とも此の
 類本ハ後ツ諸本ナリも何しうハ齡老ぬまハ今日明日の程も
 命死なん更もさしづべ甚き意と云ると昔も今も常云なりし
 詞なれば甚く省て云ども能ゆるなり翁の在る限ハと云く結べ
 且下ハ翁の命今日明日ともさしづべとあり落凹物語ハ
 中納言の更と云
 多きと云ふ夜中曉ともさしづべを又老みと云く今日明日ともさ
 しづべをさしづべ何と云○此世ハ人ハ赫映姫ハ竹中より出て尋常の人
 ぢぬハ此ともさしづべなるべし俱舎論ハ夜摩天纏抱成媼都史多
 天但由執手樂變化天唯相向笑他化自在天唯相視成媼隨彼諸天男

○なでよ何と云といふ言を音便に切て云るなり此までハ何と
てと云意なり。推本卷ハ宮薨おつると姫君ナキヒト三人チヨウシ成終つて御さまかつてもとむた今一度又まゝんとおぼしめすべし
の答 なるよさるるは信べきと何れ是も同意なり○かゝるは
如此てもと音便に云るなり○いまいふなりをいふ抄本にいよ
きあしといふいふはいよまどかゝるとも云て在字をよめり。伊勢
物語廿八段昔西院帝とまゝの帝おしすしり其帝の皇女ミコ子タカとまゝいふまどかりと又九十六段堀川のおおいあつち君と申し
まどかりととまどかりとと云同音まていさゝかゝる軽方カホキカタは
いふ。若紫卷尾君紫上のいさけなまきと歎く詞なり。まど今おのれ又持まゝいふ

で世にわんせんといふむとていさゝかゝるとも似たり。女ハ獨
在ゾルづきにあひ翁の在ゾラるなりハ此カといふまゝ翁ナラにたりて獨ヒトリ
てハ在イマまじりれば男を定終つてなり○ひかりくハ師記傳山佐知海佐知
の下ノ下云一人ヒトハ幾人イタダキも何ナニも一人と云るまて其餘
此人コノヒトに對カつて云る。古更記山佐知も己オノが佐サと知チいと重オモ云ハ凡
て物を對カつて云時の古言を格めて山佐知の方ハ海佐知に對カへ海
佐知の方ハ山佐知に對カつて云るなりさる。俗ハ万葉卷九長歌長歌に遠津國
黄泉ヨミの夢サカに蔓マフつて各オノオノく向ムクく天雲アマノクモの別ワカけ往ユキバ。こハ弟ケイに死シをよえ
るもく只一人乃更なり。を向くと重オモ云る是世に留トまる吾身ミミに對
つてなり。又古今歌思オモども一人ヒトといふ恋死コヒシバ誰タレもよとて藤衣

き^ス。此ハ思交^{オモカ}き^ル男と女との中^{ナカ}ニ行方^{ユクカタ}ヲおぼ^シ一人 今世^{イマヨ}ハ心^{ココロ}もて
若^ニ恋死^{コイシ}バと云^ハま^シ今一人^{イマヒト}にむ^カへいつ^ツり 思^{オモ}へん一人^{ヒト}ハ一人^{ヒト}毎^マ子^コと云^ハぐめ^クく^ハゆ^ハわ^ハれ^ハども^ト世^ヨにあ^リべ^シと
狩^カ云^ハま^シ。六帖^{ロクテウ}源氏^{ゲンジ}其外^{ソノトモ}の物語^{モノガタリ}ハ類^{タガヒ}多^ク。沙石^{サシ}集^ツりし^ルも^ハ皆^ハ皆^ハ
同音^{ドウオン}なり。大和^{ダイワ}物語^{モノガタリ}の菟原^{ウハラ}美女^{メウメ}の段^{ノセグミ}ハ^ハひ^トり^クま^シ阿^ア比^ヒな^ハ今^{イマ}一人^{ヒト}
お思^{オモ}ハ絶^{ツツ}なむ^ト何^ニハ^ハ殊^ニハ^ハ此^ノと^ト同^シさ^ニむ^{ナリ}。○逢^{オウ}ふ^トま^シは^ハち^ニは^ハ
ひ^ト神^{カミ}と^トり^クて^ハ抄本^{セウホン}ハ逢^{オウ}は^ハや^ト何^ニと

か^カが^ガ姫^{ヒメ}い^ハく^ハよ^クい^ハ何^ニぬ^カ形^{カタチ}と^トふ^ハら^ハも^ハせ^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな
バ^ハい^ハく^ハや^ハま^シく^ハも^ハい^ハく^ハよ^クい^ハ何^ニぬ^カ思^{オモ}ふ^ハら^ハも^ハせ^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな
な^ハり^ハく^ハい^ハく^ハよ^クい^ハ何^ニぬ^カ思^{オモ}ふ^ハら^ハも^ハせ^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな
○^トい^ハく^ハい^ハく^ハよ^クい^ハ何^ニぬ^カ思^{オモ}ふ^ハら^ハも^ハせ^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな
○^トい^ハく^ハい^ハく^ハよ^クい^ハ何^ニぬ^カ思^{オモ}ふ^ハら^ハも^ハせ^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな

る我^{ワガ}と恋慕^{コイヒメ}し^ル人^{ヒト}とな^レハ^ハ實^{ジチ}ニ深^{フカ}き御^ミ心^{ココロ}を何^ニい^ハ今^{イマ}我^{ワガ}心^{ココロ}輕^{カろ}く
承^{ウケ}引^ヒて後^{ノチ}男^ヲの心^{ココロ}変^カ轉^ルく飽^アきん^ハや^ハ手^テ悔^{クシ}す^ハま^シあ^ハり^ハ能^ク深^{フカ}き真^{マコト}実^{マコト}心^{ココロ}
なりと知^チさ^シし上^ノなり^ハい^ハ得^エある^ハい^ハなり^ハ詞^{コトバ}を甚^シく畧^{リョウ}す。文^{フミ}お
こ^ハ万^{マン}葉^{エフ}ニ^ハ梓^{スズ}弓^{ユミ}引^ヒる^ハま^シに^ハく^ハよ^クい^ハ何^ニぬ^カ思^{オモ}ふ^ハら^ハも^ハせ^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな
い^ハ何^ニぬ^カ思^{オモ}ふ^ハら^ハも^ハせ^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな
の^ハ其^{ソノ}更^{マシ}を剛^{ツヨク}く^ハ云^ハ言^ハなり^ハ世^ヨの^ハい^ハく^ハも^ハれ^ハ世^ヨハ^ハ好^{コト}物^{モノ}なり^ハと云^ハこ^ハ○^トか^シ
こ^ハ地^チ人^{ヒト}ハ高^{タカ}貴^キの人^{ヒト}と^ト恐^{オソ}る^ハま^シ人^{ヒト}と云^ハ意^イなり^ハ縦^{タテ}貴^キ人^{ヒト}も^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな
を恐^{オソ}て逢^{オウ}ぎ^キにあ^リぬ^ハ唯^{タダ}志^シ深^{フカ}く真^{マコト}実^{マコト}あ^リま^シ人^{ヒト}なり^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな
い^ハ何^ニぬ^カ思^{オモ}ふ^ハら^ハも^ハせ^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな
い^ハ何^ニぬ^カ思^{オモ}ふ^ハら^ハも^ハせ^ハい^ハ何^ニい^ハは^ハき^キな

人々もさういふ

○思の如くは我思の如くなり翁も兼て然思居り其如く宣ふ
よひり哉とて姫の詞と諾ちい喜ぶさなり○そいひ鈴木氏
云く論語子夫子至於是邦也必聞其政求之與抑與之與とを同じ
く按て奥に義の字を以てそいひと訓なりと云はき按て俗言よ
ソレハニアとて其意をゆひ又文の中間に言立て其更と諾る始に云
とて聞ち貫之集蟻通の神みくしげもなりやそいひ何の神との
申とせとて土佐日記正月七日の条に抑いひ讀むるを云とて思ひ
○かごのまは恋慕ふ五人の如此どなり寒暑も不厭通來るを云
疎畧なる心も見わはれ此上り志の深と云すハ如何様乃更ぞ

と翁の何やと問はるなり

かごのまは恋慕ふ五人の如此どなり寒暑も不厭通來るを云
疎畧なる心も見わはれ此上り志の深と云すハ如何様乃更ぞ

○かごのまは古板本より抄本はかごなりと云はいなり
アと作しとい字を寫漏きなりとて末摘花卷源君琴と何なるの
りかごのま手なりとて物之音の筋をねるものなりと云は
と○人の志ひしなり云は翁の云る詞なりとて何なりと云い
さしなりと云るハ姫ハ既スデ此更思依オモヒヨリる由なりハ何イカで
勝劣ハさしむと云る殊更めきてゆえなりとて此の文彼菟原ウサハラを

種々あり。著聞集好色部。女房の局此子在と知らずして扇を

かちめと鳴して遣ひまはる。又今物語十訓抄。薩摩守忠度何の宮

ぢりね女房物申さすとも局の上あるあひり。殊外夜

の更りた扇をととくくと遣鳴て聞ききりたバ又狭衣上狭

君昌浦菅とちひまく何やま家共も只一筋つ置渡を憐みに

ひり扇を笛を吹けて夕ぐへこ此ハ今世扇の先ハ帟と當く吹

ぬし然ども此ハ然ハいあらで扇を笛のめめかど何り是ハ物の音も

て姫を誘出さんとするさあふ今も係想する女の門に立て手を

拍鼠啼なひひ古今かもも更やしし○かつけあくもハも字類本

よりて補つ。舒明紀子四年十月唐國使人高表仁等到難波津云曰

風寒之日飭整船艘以賜迎之歡愧貴人の賤き我を恵みハ君の恥

於しづきもたのも其も不顧めみられしを歡意もて已もるも君

を辱しむる義あり故に君を崇て已と謙意となまり。桐壺卷いい

はいなまきもみならせどかついちは御心ぐへ類なきを頼み

くまらると○きつなげ形る所ハ古事記子伊那志許米志許米岐織

國書紀子汚穢と積多難積とあり。万葉卷四子いあちあむ時の妹

の葎生の穢屋戸入あきむのもと何り○きはありつもかしこ備

まとあらし抄本ハ何りのつかしこあるも何り宇治拾遺卷六子

孔子子叟のいさくきつもありてたのちま人もも又迷神子惑さ我

身左京の官人なり九條も止づきかつあらず來つまきつあり

翁直子對て云言なれば云と云てハ無禮に違ハ必申侍ると云べし
知なれば然よむべし 上ハ世界の男何てなるも賤しきも云ハ甚廣
き更なれハ敬言ハ无了ん有ぬへし色好と云
るハ限五人と有よりハ皇子と始大臣納言めて貴人の限と定りつ
まバかしこきて來ひハ文を遺ひハなど云べきと敬言なく只手と
摺のよあつとと云のこちより以上ハ地の詞なり又此人くまかろの
こつまゝつとのよあつと云を云と云ハ翁の姫云言ハ少異なり
翁出て云く云年月を經る物しゆふりより前件ハ係てハ直子五
人のよあつ人申言なればかくのよあつ君がちよも勝劣おとし
あさぬバ云など少礼無げなる更なしされば此も必申べしと
云べきなり凡て地の文ハなめしく書きまとも難ハ恐て云
文あり

こはよはるなり人の恨も老まじと云て五人の人ともよきなり
と云てぬいりていふ イサセバ

○是よきなりハ翁が詞なり○いへハ地の文あり上よ云る如

く此ハりよと諸本よ此ハ姫の詞を翁の諾する由を五人よ告る
ちかりよと云と不取更てハ御志の程ハ云へしと云るも翁
此詞とゆふよきなりと云る五人の詞とゆふ解べういふさて
此も云うせばと不云でハなめし 地の言ゆる左
ハ訓と改つ ○よはるなりとい
はばハノタヘバと云へしと文の地なれば難ハなし○入て
りよハ翁入て五人の諾するよと姫告云なり
かや姫の作のよハ天竺佛の歩る此と云ふの阿そ
そはをぬくはと云

○天竺は諸本よなきと校本よ從て補つ師 玉勝間
卷四よ 云源氏物語ハ佛
御迦陵頻迦の声御一腹官の御侍役のめむやと云る是の御

言今世の心も思へば佛の迦陵頻伽の御声など云べきも置
 知更タリてけむと云き此も此定めて佛の石は御鉢と云へくゆち河
 社に佛の御石鉢ハ西域記に波刺斯國に釋迦佛鉢在此王宮より南
 山住持感應傳に世尊初成道時四天王奉佛石鉢唯世尊得用餘人不
 能持如來滅後安鷲山與白毫光共為利益四天王のく一つの石鉢を
 奉るるを佛四を重て按て一とゆへ鉢なりとの抄に續博物
 志に佛樓沙國有佛鉢受三升許青玉也或曰青石或曰雜色而黑多四
 際分明厚可二分貧人以少華投中即滿富人以多華正復百千方斛終
 不滿或曰在月支國ある水經注に西域有佛鉢今猶存其色青紺而光
 以和名抄僧房子四声字苑云鉢博末反俗學佛道者食器也猶別記
上具出

一のハ姫が翁が告る言なり

クラモナクミコ お持多子ヒムカシの東に海ありホウライと云ふあたりに石シロカネを根
ゴカネと云ふ石ありしヒラタキふを雲やとて樹ありとて一とて
 ちりちりひらひら

○蓬萊山の更ハ列子に渤海之東有五山岱輿員嶠方壺瀛洲蓬萊也
 其上臺觀皆金玉也珠玕之樹叢生而五山之根無所連着隨潮波上下
 不得暫峙焉帝恐流於西極使巨鼈十五舉首而戴之迭為三番六万歲
 一交焉國讓卷に左大將殿大なる海形とて蓬萊は山の下れ龜乃
 腹のハかかると入り山ハ黒方侍従くのえ香合ふ物
 だん心土として造玉の枝並立ちたりとを抄り引たり○玉枝ハ蓬萊

のよハあゝ孫と淵鑑類函に洞冥記云大初三生東方朔從西那國還
得風聲木十枚實如細珠風吹枝如玉聲有武事則金革之響有文事則
琴瑟之響上以枝賜大臣人有病則枝汗將死則枝折里語曰年未半枝
不汗此木五千年一濕萬歲一枯縉雲之世生阿閼風也何ハ玉枝
に似たりと秦翁云みよとて終き

今ひやうりハもろくこゝろ何ハ火鼠の裘と云ふ

○是ハ右大臣安倍のみしやう此ハ名と出さず今ひやうり云る
おししるし○火鼠の皮ごころハ諸本かきぬも皮ごころも
何と何とよのめけと歌かこころもとまは後一一方子定つ
猶六帖に皮ごころもの題にやとて夏冬ゆる衣扇と云ふ山

よ住人 万葉卷九詠仙 万葉十 弥彦の神のふもやま今日らも鹿

の伏らむ皮服著而角附なる 是ハ何とて小宜き中ハ猶又卷日

知命を 傷る歌 毛許呂裳遠春冬かまけく幸ま々宇陀の大野ハたもほ

えやうも字鏡子 既布也加波也 呂毛又弥乃 和名抄子説文云裘 音未和名加波古

沼皮衣也未摘花卷子ハふもきけ皮きぬ十訓抄子 右衛門督伊勢脚

し 菟裘賦と云ふきけのこころ何とて云て笑まし更何と凡皮ごころ

しと云る方多くけり云と○火鼠の更ハ和名抄子神異記云火鼠 和名

比祢 須三 取其毛織為布若汚以火燒之更令清潔 上河社子吳録子云く日

南北景縣有火鼠取毛為布燒之而精名火浣布 吳録ハ張勃撰州卷令

搜神記云々崑崙之墟有炎火之山々上有鳥獸草木皆生於炎火

娶もんこのふまへ女君のやうにあらば辞とみだせば狂いゝあ
 りもてつゝあゝ。上若菜巻源君よりずむに朧月夜君に逢ひ
るを紫上は語りてハ中空なる身の
 為苦しめて併は涙ぐハか安の御けいさこそ苦しけれ只わい
 こびる源氏の言ハか教はるゝなり契沖法師ハ俗ハオナシ
 う師ハジンシヤウニと云ふ當はりと云まき於此ハ手短ウ元造作
 ニやど云意なりと鈴木氏云はき○何ゆりよるゝハ邊をばた
 云意なり古史記肥川ハシノハヨリオホシク
上段著從其河流下と何る傳ハ今の語なりハ從
 其河上と云ふきを如此云るハ古語のさゆなり從ハ表の意ぞ須磨
 卷ハ沖より舟もぬ謠の〜漕ゆ〜古今春下深養
父牙の詞書ハ
 山川より花の流るゝはよのよど同一と云はき○な何りきと云

此ハ赫映姫か〜も不可得物とゆ〜とゝハ畢竟我等と嫌キハ
 りよるぢれ然回遠ハと云ふよりハ一向ハ手短〜我家の邊アキハ勿寄ヨリク
 來との〜と云るなり下龍首玉の段ハ家ハ邊トに今ハ通トじ
 とゝ大納言の方より疎ウむ意ハ〜此の反ウなり○ま〜此言ハ
 人字を省てう〜と云て後撰雜詞書ハ世中と思ふ〜と傳り
 比葉平朝臣住佐ぬ今ハ限ト山
里子妻木撫つき宿求て須磨巻六条御息所
葵上の一節ハ思憂
 聞えさせし心誤ハ此御息所も思ひま〜て別ハひみ〜と源ハぬが
 き〜抄ハ憤字を當ハり字書ハハ房吻切周語陽瘴憤盈
註積也鬱積而怒滿也と何りウ
 ンの音なり昌喜よハ季吟翁
四冊子抄
ハ温字なりと云はき
切説文
 怒也本作愠廣韻恚也倉頡篇恨也ハ根ハ怒ハ又倦ハ或ハ憂ハ
 ハ无とけも集韻紆勿切音鬱心所鬱積也ハ然ハ

のち〜と云人も何まで然り〜は直にウミテウクテなご〜も
 何も宜し〜をゆえに此言ハ困じ調じ怨じなご〜類め〜必字音とこ
 る所〜故按よ 慍字と鬱の同音 鬱字ち〜し字書よ、紆物
 切音尉説文木叢生者書五字之歌鬱陶字予心疏一憤結積聚之意
 と何り。侘果〜心の結ぶ〜音と何れハ此字よく當まり。此
 ツを省テウシ〜ニヲ轉テウシ〜も云例ハ屈とクシ〜もクシ
 シ〜も云。須磨卷下十二 打〜と思〜に。竹川卷下十三 我身
 多し〜を考テウ
 ツとウシ〜も云べ〜と證〜

竹取翁物語解卷一

